高尾山報 令和6年10月号 毎月1回発行 通巻第729号

令和七年 高尾山中興開山六百五十年

高尾山報

令和6年10月号

八王子・南大沢交通安全協会主催

交通安全祈願火渡り祭厳修

九月十四日　於・自動車祈祷殿大広場

法の水茎 (148)

大正大学講師　髙橋秀城

我が宿の
菊の白露
今日ごとに
幾世積もりて
淵となるらん

（『拾遺集』清原元輔）

（我が家の菊の白露は、今日の日が巡ってくるごとに滴り続けて、これからどれほどの時代を経て淵のように深くなっていくのだろうか）

菊の花が美しい折節を迎えました。白に赤、黄色にピンク……色とりどりに咲く菊の花は、春の桜に対して秋を代表する植物です。どちらも日本の国花として、古から親しまれてきました。

冒頭の和歌は、旧暦九月九日の「重陽の節句」（菊の節句）に合わせて詠まれたものです。重陽とは「五節句」（正月七日（人日）・三月三日（上巳）・五月五日（端午）・七月七日（七夕）・九月九日（重陽）の一つで、縁起の良い陽数（奇数）が重なる喜ばしい日です。

菊の花は、古くから不老長寿の効能がある霊薬とされてきました。それは、中国には菊の露が滴り落ちてできた川（菊水）があり、その水を飲んだ者は老いることがなかったという中国の故事に基づいています。日本においても、この日は小高い山に登って、杯に菊の花を浮かべた酒（菊酒）を飲み、邪気を払って延寿を願う風習がありました。

また前日の八日の夜に、菊の花に霜よけの真綿をかぶせてそこに香りと露を移し、翌日その綿で身体を拭うと老いが除かれるという風流な慣習もありました。平安時代に書かれた『紫式部日記』にも、重陽の日に「菊の綿」（菊の被綿）を持ってきて「いとよう老のごてたまへ」（念入りひ捨てたまへ）と語る場面が に老いを拭き取ってお捨てなさい）と語る場面が描かれています。

ちなみに、九月九日の重陽の節句は「おくんち」とも呼ばれます。全国的に有名な九州北部の「唐津くんち」（佐賀県唐津市）や「長崎くんち」（長崎県長崎市）も「お九日」に由来すると言われ、今では「秋祭」を総称する言葉となっています。

今年の旧暦九月九日は、新暦では十月十一日。行楽にも適した季節となりました。収穫の秋に感謝しつつ、夏の疲れを癒やしてみては如何でしょうか。

「くんち」つながりから、今月号では九州地方に伝わる弘法大師空海（七七四～八三五）伝説について書いてみたいと思います。以前は長崎県の壱岐・対馬・五島列島を取り上げましたが（「法の水茎」144）、九州南部にもさまざまな伝承が残されています。

鹿児島県の薩摩半島南端に坊津（現在の南さつま市）という港町があります。ここは奈良の唐招提寺を建立した鑑真和上（六八七～七六三）が、唐（今の中国）から船で辿り着いた地と言われ、『今昔物語集』に「此ノ朝ノ薩摩ノ国、秋妻ノ浦ニ着ヌ」（我が国の薩摩国秋妻浦に着いた）と記されています。

この坊津には、かつて一乗院という真言宗の大きなお寺がありました。寺伝によれば百済（古代朝鮮の国名）の僧、日羅（？～五八三）の建立と伝えられ、和歌山県岩出市にある根来寺の別院、後に京都の仁和寺の別院として繁栄しました。江戸時代に入ってからも島津氏の尊崇を集めましたが、やがて明治期の廃仏毀釈によって廃寺へと追い込まれ、今では「一乗院跡」（坊泊小学校校庭）としてその面影を残すのみとなっています。

鹿児島藩の総合地誌『三国名勝図会』（天保十四年（一八四三））には、一乗院の「奥院大師堂」に祀られていた御本尊について、次のような来歴を記しています。

不老長寿を願い菊酒を頂く

智山専修学院生来山される

九月五日、真言宗智山派の僧侶育成機関である、智山専修学院より、十一名の修行僧と引率の本山僧侶二名の総勢十三名が、まだ暑さの残る高尾山を訪れました。

一行は関東三大本山巡りの一環として、成田山新勝寺・川崎大師平間寺を参拝の後、高尾山の宿坊に参籠。翌朝の大護摩供修行に参列して、修行満足と学業成就を御祈念されました。

大本坊大玄関にて

本尊の木造弘法大師像は、弘法大師自らが刻まれました。一乗院の古い記録によれば、お大師さまが高雄山において千日の木食（米穀を断って、木の実を食べて修行すること）をしていたとき、池の水面に映った自身の姿を見て彫刻し、弟子の真済（八〇〇～八六〇）にお与えになったものだそうです。池に映った様子を彫ったので、いつもとは少し違ったお姿になっています。

その後、慶長年中（一五九六～一六一五）に一乗院の住職であった頼興法印が高雄山に登って法を授けられた際に、この像を託されたと伝えられています。

（『三国名勝図会』）

これまでの研究によって、往時数多の僧侶が学んでいた一乗院には、この弘法大師像の他にも、多くの寺宝が蔵されていたことが明らかとなっています。

坊津一乗院は、都から離れた場所にありましたが、海を挟んだ中国大陸とは距離的に近い位置にありました。おそらく最先端の文化や文物が次々ともたらされていたのでしょう。海路や陸路をつなぐ結び目の寺院として重要な役割を担っていたことが想像されます。

後奈良天皇（一四九六～一五五七）は、一乗院の頼忠法印に、宸筆（直筆）の和歌短冊二十枚を与えました。その中には、

移ろはぬ
色を見すとて
菊の花
露も心を
置けるなりけり

（『三国名勝図会』所収）

（いつまでも若々しい姿を保つ菊の露が、長寿を願って花の上に置いているよ）

という歌も残されています。鹿児島に花開いた密教文化の大輪は、色あせることなく全国へと広がって、これからも千代に八千代に咲き続けていくのでしょう。

（栃木北部教区普済寺）

秋彼岸先師墓地参り

九月二十二日（日）

高尾交通安全協会主催 交通安全祈願 火のまつり厳修

於・高尾山自動車祈祷殿大広場（九月七日）

参道から道場まで練行が行われた

交差点での安全を祈るお祓い

御札を受け取る
高尾交通安全協会の田中会長

交通安全祈願碑前での法要

高尾交通安全協会の皆様が御本尊様に無事故の世を祈る

八王子・南大沢交通安全協会主催 交通安全祈願 火渡り祭厳修

於・高尾山自動車祈祷殿大広場（九月十四日）

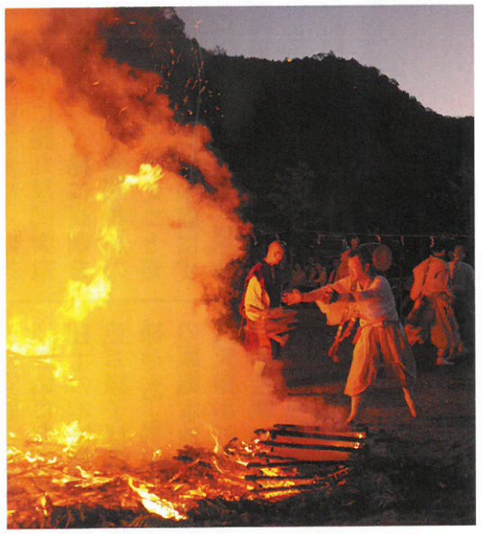
火を渡りお加持を授かる

交通安全協会の出迎えを受け入場する

佐藤貫首による勇壮な火渡り

八王子交通安全協会の小杉会長（左）
南大沢交通安全協会の田中会長

両交通安全協会の皆様が
参列され火を渡られました



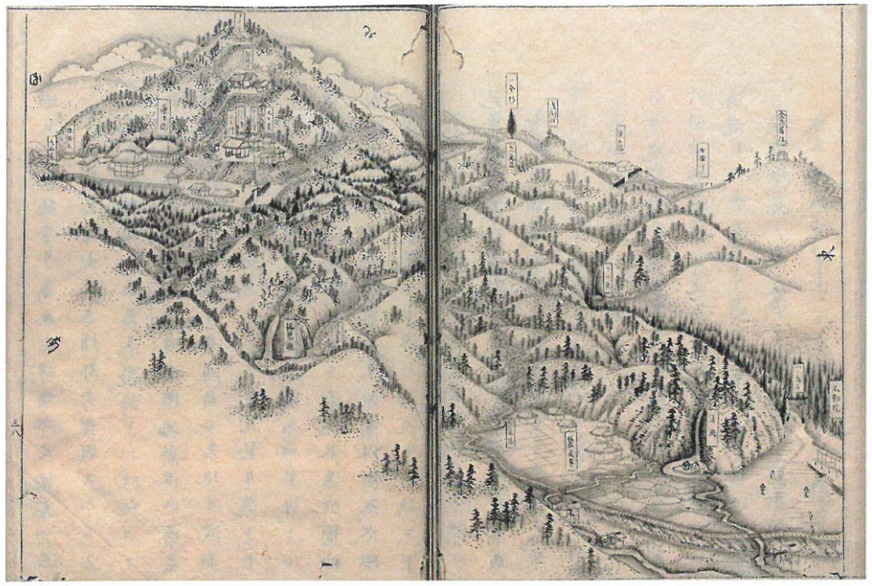
人々の願いが込められた
撫木を火中に投ずる

高尾山年代記 58

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

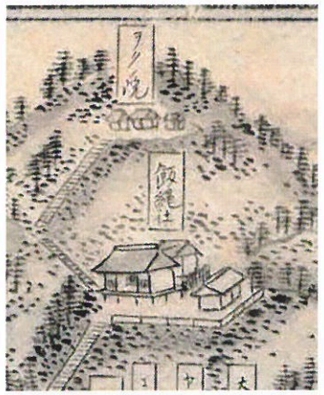
十八世秀神16　明らかとなった高尾山像



『新編武蔵風土記稿』の挿絵（国立公文書館デジタルアーカイブ）

徳川幕府から地誌編纂事業への参画を命ぜられた八王子千人同心塩野適斎・植田孟縉らは、文化二年（一八一四）から三年にかけ、多摩地域の現地調査を実施した。その幕府の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』（一八二二）「多磨郡之部」成立、以下『風土記稿』と略す）の存在により、今日、我々は約二〇〇年前の高尾山内の様子を詳さに知ることができる。

すでに寛政二年（一七九〇）の「当山絵図面下書」（以下「寛政絵図」と略す）によって、おおよその伽藍配置が判明していたが、『風土記稿』の全山を俯瞰した挿絵によって、地形と建物の位置関係を現状とも比較して明確にすることができる。とができる。以下、『風土記稿』の記述から明らかとなる山内の様子を見てゆきたい。なお、建物の規模など以前（第44、46回）に言及した事柄は省略する。



「飯縄社」と「ヲクノ院（奥之院）」

神社・末社・奥院三社

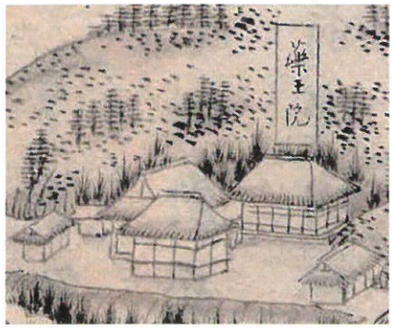
まず、自然地形としての高尾山について山川の地勢や通行路といった地理が記された後、宗教施設について、「神社」として飯縄権現社が立項されている。拝殿は文化元年から翌年にかけて修復されており、「惣丹塗。向拝表二間半に脇九尺。雲竜の彫りもの。縁に高欄を設け」「上の欄間花鳥の彫り物彩色を加え」とあり、今日我々が眼前にするのと同じ壮麗な装飾がなされていたことがわかる。三月二一日の御影供[註1]に続き、翌二二日には大般若転読[註2]の行事が行われていた。この二日間は「遠近の人すこぶる群集す」とある。鳥居二基は寛政絵図では特定できなかった位置が挿絵によって確定できる。二之鳥居の脇にある武蔵国入間郡川越在住の西村常福が願掛けに四八度の参拝を行ったという寛政七年の石碑の銘文が記される。この石碑は現在も大本堂前に安置されている。

続いて立項される「末社」の本社周囲に小祠が並ぶ様子は寛政絵図と同様である。「奥院三社」の飯縄本地社・浅間社・大天狗小天狗社（何れも現存せず）の位置は、地勢から現在の奥之院不動堂の位置と考えられるが、そこへ至る「奥院坂」は本社に向かって左手から登る、現在とは異なる経路があった。平地はわずかに一六坪ほど。矢来が設けられ、「四辺は松杉鬱蔚としていともすごし」と形容される。

別当薬王院

続く「別当薬王院」から項が改まったものと考えられる。「飯縄社の未の方（南南西）なる平地にあり」「寺の構え平地四百坪余」という記述から、現在の大本坊が一寺の伽藍として認識されており、高尾山内における宗教施設のあり方として、今日とは違う認識のあったことがわかる。すなわち、飯縄権現社はじめ山内に点在する数多の社殿・仏堂とは区分され、それらを支配するのが薬王院とする。霊山にある一寺が別当として全山を支配するのは、当時においてごく一般的な形態であった。

ここでは、行基による開山、俊源の中興など、後段に全文が掲載される高尾山縁起のあらましが語られ、後北条時代以来の寺領の変遷が記される。寛政絵図には記載のない薬王院本堂（現存せず）の規模が本堂巳午（南南東）向き。建坪は九間に七間（一間は一・八メートル）と明らかになるが、これは両袖の増築部分を除いた現在の大本堂よりも大きい。本尊は大日如来坐像。左右に不動明王・愛染明王が安置され、右側の間に護摩修法所があった。



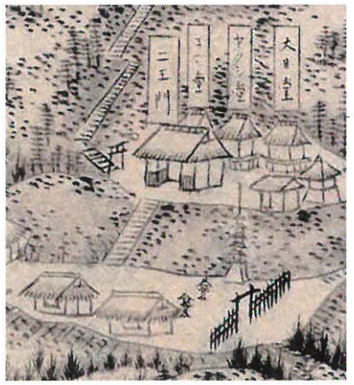
この一画が別当薬王院

続いて寺宝が紹介される。五代将軍綱吉の養女竹姫寄進による緞子水引、六代家宣夫人天英院寄進の戸帳など葵紋付の品々[註3]、北条氏照の家臣野口照房寄進の釣燈篭、七度返りの刀、盗賊耳附の板などその由来を含めた記事がある。これらの什宝は、惜しくも昭和四年（一九二九）の大火によって多くが失われたようだ。

続いては後北条関係の印判状など古文書を書体も模して収録している。面白いのは虎の印判状の主が記されておらず、当時は長尾景虎（上杉謙信）のものとわからなかったらしい。書院は「山の崖端」にあり「すこぶる眺望よし」とされ、その景観は現在の客殿と同様な眺めであっただろう。

広庭と三つの仏堂

裏門の記載で薬王院の記事は一区切りとすべきか、次に現在の四天王門の位置にあった「黒門」から広庭を経て諸堂宇の記事となる。石階を上って仁王門の奥にある薬師・大日・護摩の三つの仏堂、鐘楼、神楽堂は寛政絵図から異同はない。三棟の中央、薬師堂（現存せず）は茅葺で「薬師堂」の額字を中国福建省出身の黄檗僧悦山の書とする。本尊は行基の手刻とされる薬師如来。かつてはこの堂が山内の中心であった。毎年四月二二日に薬師講が行われた。向かって右手の大日堂（現大師堂）の額字は江戸中期の書家佐々木玄龍の筆。護摩堂（現奥之院不動堂）の額も悦山の筆。記載はないが、大日・護摩の二堂も同様に茅葺であったと推測される。宝篋印塔が仁王門を入って左にあるとされるが、寛政絵図の広庭から位置が動いている。現在は大本堂背後の崖上に移設されている。



広庭（下部）と仁王門奥の伽藍

続いて広庭にある造作物が記される。寛政七年に再建着手の唐銅五重塔（現存せず）が北側（山側）に立ち、隠寮である證寂庵（同）は寛政絵図では薬王院裏門脇だったが、「仁王門の前、石階の下、南に」と位置が変わり建坪も広いので建て替えられたか、既存の別の堂を呼び替えたか。客寮とされる蓮華院（同）は、挿絵でははっきりしないが、広庭から一段降りた平地にあって庫裏・土蔵も併設されていた。

註1　宗祖弘法大師空海の命日に肖像画を掲げておこなう供養。

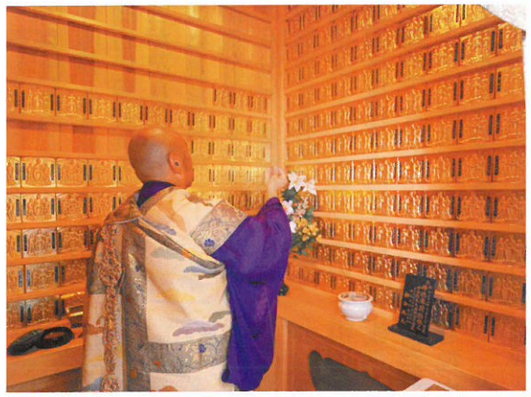
註2　『大般若経』六〇〇巻を読誦する行事。転読とは経題・訳者名のみを唱える略式の読経。

註3　戸帳は仏像を安置する厨子の扉を開いた開口部を縁取るように覆う幕のこと。水引（帽額）も仏前に飾る幕の一種。

おことわり　本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

お釈迦様との御縁に導かれて
仏舎利塔奉安懸仏総供養法要厳修（九月十二日）

佐藤貫首による回向文奉読



懸仏を懇ろに供養する

法要に先立ち法話が行われた

仏舎利塔内を参拝する参列者

結縁牌懸仏新規奉納者御芳名

桐生市　板倉　悦男
足利市　田野勝一郎
世田谷区　安藤　憲治
（順不同・敬称略）

高尾山仏舎利塔
結縁牌懸仏（かけぼとけ）のおすすめ

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安している仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々（それぞれ）のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

御納仏冥加料
一体　拾万円也

尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。（左の写真）

百観音霊場巡礼(33)

厚木市　荒井　一雄

秋遊白岩山長谷寺
欲望成就三十三
坂東朝聖十一秋
南無金峯山修験
大慈十一面拜遊

四方（よも）のくに
むつみはかりて　すくはなむ
さらなき人のさちをえつべく
貞明（ていめい）皇后（大正天皇妃）

秋、白岩山長谷寺（しらいわさんちょうこくじ）に遊ぶ

念願の坂東三十三観音霊場巡礼を十一年かけて達成…

南無金峯山修験本州…
南無大慈大悲十一面観世音大菩薩…

いろは天狗の落し文(45)

も

目的意識
心に留め
精進努力
重ねゆく

人間が行動するためには何をおいても「やる気」がないと始まりません。その目的が自分の利益のためであろうと他人のためであろうと同じです。

「自分は何のためにいま頑張っているのか」ということを心に留（とど）めて努力を重ねましょう。そうするとやる気を持続させ易くなるはずです。

観音菩薩の宗教 ㊷

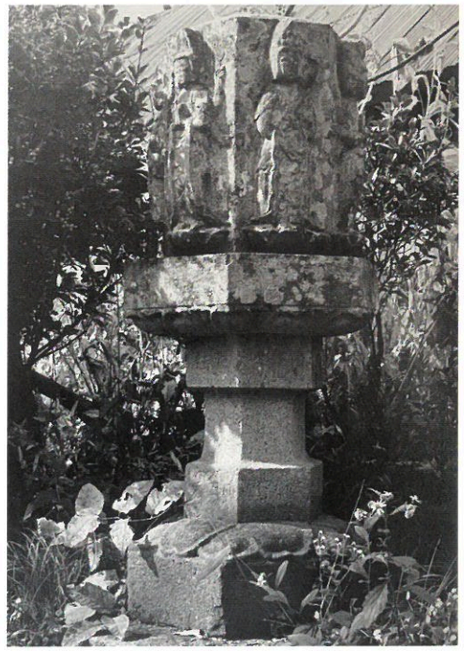
国際教養大学特任教授　金岡秀郎

如意輪観音（その20）

平安遷都からちょうど十年、延暦二三年（八〇四）に留学生空海は遣唐使船に乗り、唐へと旅立った。時に新都に吹く風は、都人たちに新たな時代の到来を感じさせるものであったろう。その二年後の大同元年（八〇六）、当初の二十年在唐の約束を切り上げ帰朝した空海は、『御請来目録』に記されているように、多くの仏典や曼荼羅、さらには密教の法具などを日本に齎した。これらは単に旅行の土産物ではなく、空海が体得した真言密教の思想の実現に不可欠の書籍・用具・画像などであった。後世の伝承によれば、空海は真言行者となるための修法である十八道も、恵果阿闍梨より授かり日本に伝えたとされる（「観音菩薩の宗教㉙」）。また、密教寺院で重視する金胎両部の曼荼羅も空海によって齎され、密教が言語的のみならず視覚的にも説明されるようになった。

空海以前、奈良時代にすでに如意輪観音菩薩は伝えられていたが、いわゆる雑密の尊格として現世利益的、もしくは護国的に尊崇されるに過ぎなかった。それに対し、空海の十八道や曼荼羅の請来により、如意輪観音は純密の尊格として哲学・思想上も造形上も体系的に位置づけられるようになった。こうした空海の時代の如意輪観音信仰は平安前期の思想史的特色と位置づけられるが、空海入定後、二世紀弱を経た平安中期に至ると、如意輪観音信仰は新たな展開を見せることとなった。

教科書的な説明によれば、十世紀初頭、課税対象を個人とする律令制が崩れると、土地に対して課税する王朝国家体制が成立していった。この時代には承平天慶の乱（九三一～九四七）、すなわち平将門の乱と藤原純友の乱が東西でほぼ同時期に勃発し、乱は鎮圧されたものの、律令制社会は大きな変容を遂げざるを得なくなった。一般的にはこの時代以前を平安初期、以降を平安中期とする。



六観音の単制六面幢。六面の竿石に六観音を彫る。東山梨郡（現・山梨市）・耕雲寺（池田三四郎・中沢厚編『日本の石仏（6）甲信・東海篇』国書刊行会。一九八三年、一三七頁）

かかる政治的な大転換は、宗教上も護国的・国家的信仰から貴族を中心とした「来世的個人仏教」への転換を出来させた（速水侑「平安時代における観音信仰の変質―六観音信仰の成立と展開―」『観音信仰』所収、雄山閣出版、一九八二年、一六九頁）。その代表的な例が平安中期における六観音信仰の成立である。六観音には天台六観音と真言六観音があり、成立は前者が早い。以下、それらの成立と意義について速水侑の詳密な研究から見てみよう。

天慶十年（九四七）三月、時の朱雀院は乱の戦没者慰霊の法会を延暦寺講堂で催すこととし、その願意をこめた願文を認めた。そこには「六鋪」の観音の図を奉り、法華経六部を書写したとある（速水前掲論文、一六九～一七〇頁）。「鋪」は「連ねる、並べる」の意があるから、六鋪とは六体を並べた観音の画像ということであろう。この願文に記された観音信仰は、「旧来の護国的現世利益的信仰とは異り、法華経信仰と結び六道に迷う亡者を救い浄土に導かんとする個人的来世的信仰であり、しかも観音像六鋪とあるごとく、それがいわゆる六観音信仰という

形で現れた」と解釈されている（同、一七〇頁）。六体の観音により六道救済を図るという天台六観音の思想は、『摩訶止観』や『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼経』（大正大蔵経No.一〇四三）に由来するとされる。後者には「能く六道の三障を破る（能破六道三障）」六観音として、大悲観世音・大慈観世音・師子無畏観世音・大光普照観世音・天人丈夫観世音・大梵深遠観世音の各名称が挙げられている。

天台六観音が成立した十世紀の摂関期は、政治の激変に伴い貴族社会に観音信仰の高まりを見せた。観音菩薩に求められたのは、死後の六道輪廻や堕地獄の恐怖を免れるための抜苦代苦であり、そのために六体の観音を供養する思想が形成された（速水前掲論文、一七五～一七九頁）。速水所説によれば、「天台六観音の成立こそは、十世紀の思想的変動の一つの現れとして注目すべき」である（同、一八七頁）。この信仰は治安三年（一〇二三）の藤原道長による法成寺薬師堂の六観音造像供養に最も華やかに現れた。法会に参加した右大臣・藤原実資の『小右記』によれば、七仏薬師、日光・月光菩薩、六観音の計十五体の丈六金色像が堂に安置され、禅閤・関白・大臣などの高位高官、天台座主をはじめとする群僧が参集し、『薬師観音品偈』が誦されたという（同、一八八頁）。

この法成寺の六観音造像については、真言僧の頼瑜（一二二六～一三〇四）の『秘鈔問答』に小野僧正・仁海の「注進文」を引用して次のように記されている。

「大慈観音とは正観音の変なり、地獄道を救う。（中略）大悲観音とは千手の変なり、餓鬼道を救う。（中略）師子無畏観音とは馬頭の変なり、畜生道を救う。（中略）大光普照観音とは十一面の変なり、阿修羅道を救う。（中略）天人丈夫観音とは准胝母の変なり、人道を救う。（中略）大梵深遠観音とは如意輪の変なり、天道を救う（原漢文）」

上記にいう変とは変化のことで、最初の例でいえば、正観音が変化したのが大慈観音ということである。すなわち、正観音が本地で大慈観音は垂迹もしくは変化身ということを意味する。上記で筆者が中略とした部分には、それぞれの観音菩薩の身体の色や印相や持物が記されている。正観音以下の六尊の観音は真言六観音と称されるもので、速水所説によれば、「大慈大悲以下の摩訶止観六観音に正以下六種の密部観音を附会し」とか、「真言六観音こそは天台六観音の本地であり、六道抜苦の功徳も真言六観音がおのおの本来有するもの」と解釈され（同、一八九頁）、さらに「教義的解釈を有さぬ真言宗の私的附会」と評せられている。右の「附会」が「牽強附会」の意とすると、天台六観音を真言宗が教理的根拠なしにこじつけて密教的な六観音としたことと捉えられる。やがて真言六観音は天台に逆輸入され、東密六観音に対し台密六観音を成立させた。そこでは真言六観音の准胝観音を除き、不空羂索観音を入れている。文献上、台密六観音の最古の例は『三昧流口伝集』（一九六九～七二）に見られる（同、二〇四頁）。これらをもって平安中期における真言六観音と天台六観音の成立とすることができる。繰り返しになるが、真言六観音は正観音（聖観音）・千手観音・馬頭観音・十一面観音・准胝観音・如意輪観音で、天台六観音は正観音（聖観音）・千手観音・馬頭観音・十一面観音・不空羂索観音・如意輪観音である。

十二世紀の真言僧・実運（一一〇五～六〇）に至ると、石山内供すなわち淳祐（八九〇～九五三）所伝として「如意輪観音六臂当六観音并六道事（如意輪観音の六臂は六観音并びに六道の事に当たる）」（『秘蔵金宝鈔』大正大蔵経七八巻、三七二頁）とあり、如意輪観音の六臂が六観音すべてに通じ、地獄以下六道からの抜苦に功徳があるとする思想が現れる（速水前掲論文、一九三頁）。このことは、十世紀には「六観音信仰のもとで、如意輪観音がその中心であるとする考え」が現れ、「如意輪観音一体に総ての観音の力が備わっている」とする思想の出現を伝えている（前掲、井上一稔『如意輪観音像・馬頭観音像』三五頁）。

なお、本年（二〇二四）、国宝に指定された京都・大報恩寺の六観音像（一二二四年、定慶等作）は、六観音信仰の弘まりと深みを伝える貴重な作例である。

いけばなの心 55

華道教授　佐藤　宗明

秋の気配が色濃くなるこの季節、いけばなの伝統的な美しさが際立つ「七夕七種」の生花をご紹介します。七夕七種は、池坊に伝わる特別な作品であり、七夕にちなんで七種類の花材を使って生ける、唯一の花形です。

通常、池坊の生花は三種までの花材で構成されるのですが、七夕の際のみ、七種の花材を使用することが許されてきました。今回の作品はその技法で作られたものです。形は生花正風体と同様ですが、秋の七草を花材に使用し、その豊かさが際立つ作品となっています。今回は、尾花が揃わなかったため、代わりに風草を使用しましたが、その軽やかな風合いが作品全体に躍動感を与えてくれました。

古来、季節に応じて花を飾ることで、神々を迎え祀る日本人の年中行事としても、いけばなは根付いてきました。

この秋、皆様もぜひ、季節の花を手に取って、古の風習に思いを馳せながら、いけばなの魅力を感じてみてはいかがでしょうか。

花材：萩、風草、葛、撫子、女郎花、藤袴、朝貌（桔梗）

星まつり祈祷のおすすめ

星まつりとは、毎年順を追って巡りくる九星にお祈りして、災厄を除き福運を招くご祈祷です。

高尾山では、**冬至に星まつり特別大護摩供**を厳修して、御信徒各位の諸願成就を祈念しております。

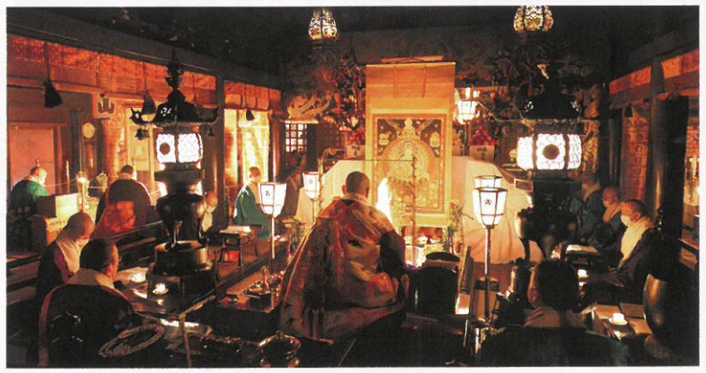
又、当山の星まつりの御札は**飯縄大権現**、**薬師如来**、**不動明王**の三尊を始め、殊に**九星**、**十二宮**、**二十八宿**等の諸々の曜星を網羅した**星曼陀羅**を内符として納めたお札で、御利益は誠に深重であります。

多くの御信徒の皆様にお申込みを賜わり、広大無辺のご加護に浴せられますようお勧め致します。

※年齢は来年の数え年（来年の満年齢に一歳加える）

ご祈祷料はお一人様千円。特別祈祷料は二千円以上となります。申し込み締め切りは**十二月八日**、冬至の祈祷終了後、お札を郵送致します。

祈祷申込希望の方はご連絡下さい。申込書や高尾山の御寶暦、振込用紙一式をお送り致します。



聖天堂開扉法要

九月十四日～十五日

残暑が厳しい九月中旬、聖天堂において、開扉法要が執り行われました。

このお堂には、薬王院の御本尊・飯縄大権現様の五相合体の御姿の一つである、大聖歓喜天（和合歓喜天）様がお祀りされております。

御信徒様が堂内をご覧頂いて参拝できるのは、一年で二日間のみです。当日は佐藤貫首をはじめとした山内の僧侶が並び、一心に祈りを捧げられました。

清滝駅前 桜のお別れ会

九月四日（水）

高尾登山電鉄の清滝駅前広場で、七十年以上に渡り見事な花を咲かせ、地元の方々や登山者に親しまれてきた桜が、老木化による折損の恐れから、九月十日に伐木されることになりました。

伐木に先立って、「清滝駅前桜お別れ会」が行われ、佐藤貫首導師のもと桜の御供養が行われました。

参列された皆様は思い出を胸に桜の木に手を合わせ、桜と人々の絆を感じる一時となりました。

七五三身上安全祈願

「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様にと、身上安全の願いを込めて寺社にお参りするという行事です。

高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月～十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈祷」を受け付けております。

どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

歳末の御護摩修行場所変更についてのお知らせ

十二月十三日に行われる「すす払い」、及び十八日の「おみがき」では、例年は両日の一部時間帯に於いて大師堂にて御護摩修行を行っておりますが、施設工事の都合で本年は奥之院不動堂で執り行います。大変ご不便をお掛け致しますが、ご理解ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

その際には堂内へご参列頂けますが、場所柄急な階段を昇ることになりますため、ご希望の方は信徒休憩所にてお待ち頂き、御護摩札をお取次致します。

御護摩は郵送でも授与しておりますので、ご希望の方は郵送御護摩係までお問い合わせ下さい。

高尾山 季節散歩

和風月名
醸成月「かみなしづき」

十月は「かんなづき」や「かみなしづき」と呼ばれ、「神無月」と書かれることが多いでしょう。

しかし、新米でお酒を醸造する月という意味で「醸成月」という別名もあり、実はこれが語源となっているのではないかという説もあるそうです。

今月の風物詩
焼き芋

秋になると、どこからか「いしやーきいも、おいも」という石焼き芋の歌が聞こえてくるかもしれません。焼きたての石焼き芋の香ばしい香りが漂ってくると、思わず立ち寄りたくなります。

焼き上がったサツマイモは、甘みが凝縮され、素朴でありながらとても美味しいものです。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

三十三段　出来ないなんて決めつけない

行動する前から後ろ向きに考えて、望ましくない結果が待っていると決めつけてしまうようなことがあるでしょう。事前に色々想定することは大事なことです。しかし同時に、「よし、やってやるぞ」と挑戦する気概を持ちたいものです。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が参加されております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますと、健康登山者限定の記念品と交換できます。

帳面……七百円
スタンプ……百円

健康登山者投稿作品
季節の絵手紙

「秋まっしぐら」

八王子市　栃谷　玲子

「みんなのおかげ」

おはなし散歩道
サバ寿司

町田市　大澤桃代

「原にはキツネが出る」と、祖父ちゃんは言った。三年前に死んだ祖父ちゃんは昭和の生まれでこの野原を駆け回っていた。高い草が茂っていたという。家から離れた野原だった。小学生の頃に友だちと遊んだことがあるが、ただの広い野原だった。

一つ先の駅で物産展があって、今朝、母から「サバ寿司」を頼まれた。祖父ちゃんの好物だったし、家族五人、みんなの好物なのだ。

大学の帰り、オレは喜んで買って帰った。

暑くも寒くもない日だった。やたらと歩たくなり、あの野原へと向かった。一つ先の駅から野原を抜ければ家はすぐそこだ。

秋風が心地よい。

商店街を抜けると、住宅が並んでいる。コンビニの角を曲がると、突然その野原は現れる。

夕方のチャイムが鳴る。もうじき日暮れだ。遊んでいた子たちはさっさと帰って行った。

野原は果てなく続く海のように見えた。風が通ると、ススキが波立つ。一面、ほとんどススキで覆われ、ちょっとした丘があって、そこに三本のケヤキが立ってる。元々道はない。土がむき出しになっている。踏み固められた土を頼りにオレはケヤキの方へと歩く。

サバ寿司を胸に抱える。キツネの話を思い出したからだ。キツネは人を騙して食べ物を奪うという。ケヤキの木にはすぐに着いた。根本には小さなベンチがあった。子どもの頃にはなかったものだがありがたく腰掛けて、袋の中を確かめる。

祖母ちゃんと両親、妹とオレ、五人分ある。オレはホッとして、袋をベンチに置き、ペットボトルの水を飲む。

丘から臨む町は、ほの暗く、家々の窓には灯りが点っている。

ふいに、ウーウー、カンカンと、火事を知らせる音が響いた。

驚いて立ち上がり、音の方角を確かめる。

――もしや！

半鐘の音は家の方から聞こえている。

オレは袋をかかえて、ススキを手でかき分け、最短距離と思われる方向へ進む。音はどんどん大きくなる。

――家までは十分足らずで着くはずだ。

ススキの野が永遠に続くかと思われたとき、ついに、ススキの手ごたえがなくなった。

町に出たのだ。

オレは一目散に家へと走る。

袋はちゃんと持っている。半鐘の音が小さくなって、やがて聞こえなくなった。小火ですんだのかもしれない。

門のところに祖母ちゃんがいた。祖父ちゃんのために菊の花を切っている。

「祖母ちゃん！　火事は大丈夫か？」

祖母ちゃんは首を傾げる。オレは半鐘が鳴っていたことを話す。

「はて、聞いてないよ」

「オレはサイレンと半鐘を聞いたんだ。野原のベンチで！」

「どこの野原だい？」

「キツネの野原だよ」

そのとたん、祖母ちゃんが笑いだした。笑い声を聞いて、家から母が出てきた。

祖母ちゃんが言った。

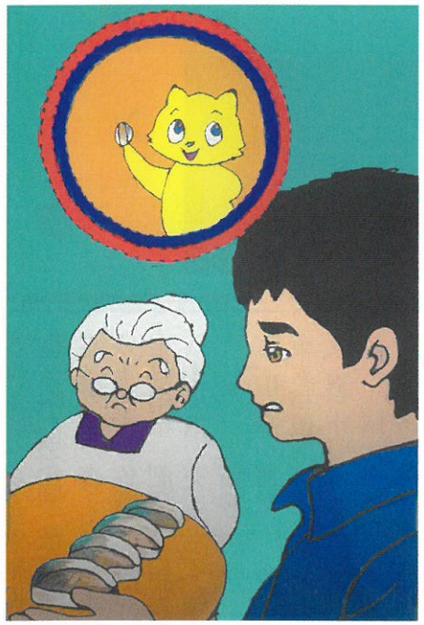
「野原のキツネにやられたよ。キツネはサバ寿司が好きだからね。見てごらん、たぶん足りないよ」

うそだ！と、オレは袋を確かめる。五人分買ったのに、中には四人分しかなかった。

「あの野原にベンチはないよ。キツネが化けたんだね」

母ちゃんが笑った。

（挿し絵・小出　茂）



登山だより

■十一月行事日程■

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

一日、十三日、二十五日
弁天秘供

十二日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

二十三日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

二十四日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十八日
奥の院開扉供養
（十時奥之院）

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

毎月二十一日午前九時勤修
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間

午前9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山の昆虫 180

カンタン

日暮れになると一斉に始まるヒグラシの蝉時雨（せみしぐれ）は高尾山の名物になっていますが、秋が近づくと次第にツクツクホウシの声に変わり、やがて哀愁（あいしゅう）を感じさせる秋の虫へとバトンタッチされます。

スズムシ、マツムシ、エンマコオロギ、美声の主は数々いますが、鳴く虫の女王と呼び声が高いカンタンの鳴き声が一際（ひときわ）清涼感を感じさせます。

コオロギの近縁であり、見た目はマツムシに近く体色は薄い緑色で、体の数倍ある長い触覚が印象的です。

その音色は言葉で例えるのは難しいですが、「フイルルルルル」と静かに穏やかで耳障りがいい感じで、上品で心地よいものです。

カンタン（邯鄲）の名前の由来は、その幻想的な鳴き声から、中国の古都邯鄲に因（ちな）むという説もありますが、定かではありません。

高尾を代表する鳴き虫ですが外来種とする考察もある一方、それを強く否定する意見の方が多く、固有の種であることを支持したいと思います。

秋の夜長をカンタンの鳴き声で癒（いや）されるのも、一興だと感じています。

（撮影・文　松島　孝）

高尾山報助成金志納者
御芳名（順不同・敬称略）

富里市　森　照森
八王子市　佐藤　光
東村山市　肥沼　和夫
八王子市　天　城
〃　新井　茂二
町田市　宮嵜　豊司
東大和市　中川　彰久
久喜市　木伏　義一
港区　中川　兼造
伊勢原市　佐々木　晋介
相模原市　菩提鍼灸院
千代田区　徳住　光則
新座市　彰山　粧麗
世田谷区　桜井　正美
八王子市　石坂　和夫
小平市　関　道雄
高尾山健康登山者一同

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp